現代社会フォーラム　No. 9, 60-73（2013）

《学問のひろば》

「京都学」を学ぶための文献ガイド

山　田　邦　和・天　野　太　郎

はじめに

同志社女子大学現代社会学部社会システム学科には「京都学・観光学コース」が設置されており，そこで山田（考古学・歴史学）と天野（人文地理学・歴史地理学）の両名は，それぞれの専門分野を切り口としながら教育活動にたずさわっている。ここでは，本学の京都学・観光学コースで学ぶ学生諸姉のために，歴史学と地理学からみた「京都学」の主要な参考文献を案内してみたい。ただし，現実的な研究や学習の場において，これは地理学，これは歴史学というかたちで明確に峻別しているわけではもちろんないし，そもそも「京都学」とは京都という地域を対象とした地域学の一つである以上，多領域からの観点や研究者らによる広領域の研究が多いことも特徴の一つとしてあげられよう。そうした観点から，本来は厳密にはこうした分け方は難しいのであるが，文献ガイドという性質もあるため，思い切った形で分類していること，実際には複合的な視点からの文献が多いことも留意していただきたい。また，本来はこうした多岐にわたる研究業績は論文（学術雑誌に掲載された論文）形式のものも質的に高く，かつ数的にも膨大に存在し，学生各位におかれても京都学のまなびには非常に重要なものではあるが，ここでは入手・閲覧の容易さ，京都学学習の入り口への輩となるものと考えて，同志社女子大学図書館などでの閲覧のしやすさにも考慮しつつ，主たる出版書物に限定して紹介していきたい。歴史学分野，地理学分野という大きく２つの分野に分けて紹介をしていくが，両者は隣接分野であり相互の視点からの書物も多い。したがって１の歴史学の方で紹介された地理学分野をふくむ書物については，２の地理学分野では省略をしつつ案内を行うことにしたい。（山田・天野）

1　歴史学分野

(1)　通史・概説

京都の歴史を学ぶ上で基本中の基本なのが，**京都市編『京都の歴史』全10巻**（京都市，1970～1976年）である。京都の歴史について概略を知るためには，まずこのシリーズの関連部分を読むことから始めるべきであろう。各巻には付録としてカラー刷りの地図がついており，これもたいへん詳細で便利。その他，京都の歴史をまとめたシリーズものとして，**佛教大学編『京都の歴史』全４巻**（京都新聞社，1993～1995年）や，**村井康彦編『京都の歴史と文化』全６巻**（講談社，1994年）も参考になると思う。

手軽な一冊本での京都の通史としては，まず**林屋辰三郎『京都』**（岩波新書，岩波書店，1962年）を挙げる。京都の歴史の簡便な概説書として，今もその王座は揺るがない。京都に点在す

る史跡を歩きながら古代から近代までの京都の歴史を通観するという構成も絶妙であり，京都を知るためにはまずこの本を勧めたい。ただ，林屋の著書は半世紀も前の著作であり，そこに古さを感じる向きには，**脇田修・脇田晴子『物語　京都の歴史―花の都の二千年―』**(中公新書，中央公論新社，2008年)が良いだろう。特に，著者夫妻の専門である中世・近世の部分は圧巻といえよう。その他，**岩井忠熊編『まちと暮らしの京都史』**(文理閣，1994年)も，多数の専門家の分担執筆によって構成されており，ひとつひとつの項目が短いので読みやすい。

いささか変わった京都論として，**梅棹忠夫『梅棹忠夫の京都案内』**(角川書店，1987年)，**同『京都の精神』**(同，同年)，**同『日本三都論―東京・大阪・京都―』**(同，同年)が面白い。民族学・比較文明論の泰斗が，いつもの冷徹な姿をかなぐり捨てたように，みずからの生まれ育った京都の特質を熱く論じている。京都人の考え方を解明するキー・ワードが「京都中華思想(何事も京都が一番であるという思想)」であることがよくわかる。また，いささか手前味噌ではあるが，**山田邦和『京都』**(カラーブックス，保育社，1993年)も一読していただきたい。ページ数は少ないが，山田にとっては若き日の思い出に満ちた作品である。前半は奇麗な写真を配して，京都の町を案内しながらその時々に思いついた話題を語っている。後半は京都の歴史の著者なりの通史。京都生まれ京都育ちの京都人の語る京都案内ということで，独自の視点を面白がってくれる人もいたらしい。

「京都学」に関する資格として著名なのが，京都商工会議所が主催して毎年１回実施される「京都・観光文化検定(京都検定)」である。**森谷剋久監修，京都商工会議所編『京都・観光文化検定試験―公式ガイドブック―』**(淡交社，2004年)はこのテキスト・ブック。京都に関する各種の知識がまんべんなくちりばめられており，京都学の簡便な概説として使うこともできる。もし，この試験にチャレンジしたいという向きには，**京都新聞出版センター編『京都検定　問題と解説』**(京都，京都新聞出版センター，2005年～刊行中〈2012年現在では第１回～第８回までが出版されている〉)や，**中村武生『中村武生の　京都検定日めくりドリル　500問』**(京都新聞出版センター，2008年)などで学ぶことを勧めたい。

(2)　文 献 史 料

歴史学を学ぶための基本が，文献史料の読解である。どんなに偉い先生が書いた本であっても，その内容を無批判に鵜呑みにするのではなく，その論拠となった史料に立ち返るという姿勢を持つことが，「歴史のお勉強」から「歴史学の研究」に脱皮する第一歩だといいうる。

京都の歴史は日本の歴史，といっても過言ではないのであるから，日本史の史料集は京都学を学ぶためにも大変役に立つ。ここでは代表的なものをいくつか挙げておこう。まず，わが国最大の日本史の文献史料集が，**東京大学史料編纂所編『大日本史料』**(同所，1901年～刊行中)である。明治時代に国家的プロジェクトとして立ち上げられた事業で，現在でも地道な編集作業が続けられている。現在までに380冊ほどが完成しているが，まだまだ未刊行の部分も多い。ただ，既刊の部分についてはこれ以上の史料集はない。最近では，東京大学史料編纂所のウェブ・サイト(http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html)で「大日本史料」の綱文(項目名)のデータ・ベースが公開され，検索が大変便利になった。**神宮司庁蔵版『古事類苑』全50冊**(吉川弘

文館，1896～1914年初版〈1995～1999年復刻〉)は，明治時代に造られた「日本研究」の最高峰の事典。日本文化についてのあらゆる知識を30部門に分類し，それを原典史料によって整理している。2010年には現代仮名遣いによる索引である**『古事類苑新仮名索引』**が刊行され，ますます便利になった。**『群書類従』『続群書類従』**は，江戸時代後期の国学者である塙保己一が編纂を開始した一大叢書で，日本のさまざまな史書や文学作品を，合計三千種以上も収録している。

京都に特化した史料集として，**京都市編『史料・京都の歴史』全16巻**(平凡社，1979～1994年)がある。前述した『京都の歴史』の続編とでもいうべきシリーズで，これも『京都の歴史』と並ぶ基本図書として位置づけられよう。行政区ごとに巻が分かれ，主要な文献史料が刊本化されている。いわば，史料から見た京都の地域史，ということができよう。多くの市民に読んでもらうという目的から，史料がすべて読み下し文とされており，初心者には読みやすいであろう。索引がついていないのは不便であるが，ページをゆっくりとめくりながらお目当ての史料を探し出す喜びは格別だといえよう。第1巻は「概説」にあてられており，これを読むことで京都の歴史を学び直すことができる。

京都に関する地誌や名所案内記を集大成したシリーズとして**『京都叢書』**がある。近世京都の史跡ガイドブックの金字塔となった『都名所図会』『拾遺都名所図会』を始めとして，京都についての基本史料が網羅されており，近世から近代にかけての京都の歴史を研究するためにはなくてはならない史料集となっている。これを丹念に読むことによって，近世・近代の京都の名所旧跡や風俗，年中行事などを詳しく知ることができる。ただ，いささかややこしいのは，『京都叢書』と題されたシリーズには，大正3年～6年の『京都叢書』全16冊(京都叢書刊行会)，昭和8年～10年の『増補京都叢書』全20冊(同)，昭和42年～51年の『新修京都叢書』全23冊(臨川書店)，昭和60～平成元年の『新撰京都叢書』全13冊(同)の4種類が存在しており，それぞれ内容が異なっていることである。まず，大正時代の**『京都叢書』**は，江戸時代の京都に関する史料の多くを網羅したものである。ただ，現在では大きな図書館などでしか見ることができないし，この改訂版である『増補京都叢書』『新修京都叢書』が出版されたことによってほぼ役割を終えたということができる。昭和前期に刊行された**『増補京都叢書』**は，大正の『京都叢書』の増補改訂を意図して編纂された。全部の史料が活字化されており，また索引も完備しているため使い勝手が良く，現在でも充分に使用に耐える。一部に翻刻の誤りがあることが指摘されているけれども，通常の使用には大きな問題とはならないだろう。昭和後期の**『新修京都叢書』**は『増補京都叢書』をさらに改訂したもの。『増補京都叢書』よりも校訂が厳密で信頼できるし，『増補京都叢書』に収載されていない書目も納められている。第23巻が「古地図集」に宛てられていることもありがたいし，2006年には待望の索引が刊行され，さらに使用に便が得られた。ただ，一部の書物については活字の翻刻ではなく版本の複製で収録されており，くずし字に慣れない人にとってはやや使い難いかもしれない。その場合には『増補京都叢書』と併用すれば良いであろう。昭和末期から平成初期刊行の**『新撰京都叢書』**は，以上の三種とはまったく内容が異なっており，上記三種の「続編」という位置づけになる。明治時代を中心とした時期の京都の基本史料が納められており，近代の京都を知る上では必備の史料集である。

竹村俊則編『日本名所風俗図会』第７巻「京都の巻Ⅰ」，同第８巻「京都の巻Ⅱ」(1981年，角川書店)は，江戸時代の京都の観光ガイドブックの代表的なものを網羅している。Ⅰに「京童」「京童跡追」「都林泉名勝図会」「花洛名勝図会」「宇治川両岸一覧」，Ⅱに「都名所図会」「拾遺都名所図会」「帝都雅景一覧」を収めている。『京都叢書』に収載されていない書目が含まれている上に，編者による克明な注釈がつけられているので読みやすい。書目解説も充実している。**駒敏郎・村井康彦・森谷剋久編『史料　京都見聞記』**(法蔵館，1991～92年)は，『京都叢書』が地誌や名所案内を主としているのに対して，京都に関する江戸時代の紀行や見聞録を集大成している。個人的にまとめられた紀行文という性質上，内容が雑多との印象を受けるかもしれないが，読み込むならば江戸時代の京都観を知るためにはいずれも重要であることが理解されるであろう。

(3)　事典・文献目録

京都の史跡や土地に関しては，**林屋辰三郎・村井康彦・森谷剋久監修『京都市の地名』**(『日本歴史地名大系』27，平凡社，1979年)が重要である。古代から現代にいたる地名町名の由来から，寺社仏閣の沿革まであますところなく詳述されている上に，可能な限り原典史料にも触れており，いわば，京都の土地に関する総合事典だといえよう。索引がひきやすく，目的の項目に早くたどりつけることもありがたい。最近，インターネットを利用した有料データベース「ジャパンナレッジ」(図書館によっては利用者に閲覧させているところもある)に収録され，そちらでも閲覧できるようになったことも便利である。また，「京都学」についての引きやすい事典として，**佐和隆研・奈良本辰也・吉田光邦ほか『京都大事典』**(淡交社，1984年)がある。京都市とその周辺地域に関する主な事項を簡潔にまとめている。なお，同じシリーズで**『京都大事典府域編』**もある。**京都市姓氏歴史人物大辞典編纂委員会編『京都市姓氏歴史人物大辞典』**(『角川日本姓氏歴史人物大辞典』26，平成９年，角川書店)は，京都の歴史形成にかかわった人物と姓氏を，約8000項目にわたって収載している。ひとつひとつの項目は短いけれども，他の事典では扱われていない人物も多数おさめられているのが便利。公家，寺社・宗教家，武家・政治家・官僚などに分けた概説の部分も充実している。なお，京都に限ったものではないが，**『国史大辞典』全16巻**(吉川弘文館)はわが国最大の日本史辞典である。これを牽けば，日本史のたいていのことに関する基礎知識は得られるから，京都学の研究の際にもぜひ活用していただきたい。これも，有料データベース「ジャパンナレッジ」に収録されている。

京都の歴史の中でも関心の高い平安時代については，**角田文衛監修，古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』上巻・下巻・別巻**(角川書店，1994年)がある。平安建都1200年記念出版のひとつとして刊行されたもので，上下２分冊に，資料・索引編がつく。歴史はもとより文学・建築にいたるまで平安時代に関するあらゆることが網羅された大冊であり，特に，平安時代の個人についての情報は圧倒的。史料や先行研究を克明に挙げているのも便利であろう。女性名がすべて訓読み(たとえば，藤原道長の正妻の「源倫子」は「みなもとのりんし」ではなく「みなもとのともこ」で立項されている)であるという方針を徹底しているのはユニークである。なお，近年，CD-Rom 版が刊行された。

京都についての文献を検索するためのツールとして，**京都府立総合資料館・京都図書館協会編『京都府資料所在目録』**（同館，1968年），**同館編『京都府関係雑誌論文目録』**（同館，1971年）がある。京都府立総合資料館を始めとする京都府下の主要図書館に所蔵されている京都関係の図書，雑誌掲載論文，資料を集大成し，分類別の目録としたもの。どこにどんな資料が所蔵されているかを一覧できるのは便利である。京都府立総合資料館の閲覧室で使用すれば，本書で検索した資料の現物の多くに即座にアクセスすることができ，勉学にはこの上ないであろう。ただ，いささか刊行が古いことが難点である。

(4)　史跡フィールド・ワーク

私は，京都学を学ぶ上ではフィールド・ワークが最も重要であることを確信している。部屋にこもって本を読むこともちろん大事であるが，それ以上に，京都の土地から足と身体で学べることは限りなく大きいのである。前述した**林屋辰三郎『京都』**も，史跡フィールド・ワークに使うことができよう。

竹村俊則『昭和京都名所図会』全７巻（駸々堂，1980～1989年）は，京都の史跡案内書としては他の追随を許さぬ名著である。京都の名所旧跡が網羅されているという点では，他に並ぶものがない。著者自筆が描いた見事な鳥瞰図が挿絵として掲載されているのも本書の価値を高めている。この本の前身は，同じ著者の**『新撰京都名所図会』全７巻**（白川書院，1958～1965年）である。内容自体は『昭和京都名所図会』に座を譲ったけれども，古き良き時代であった昭和20～30年代の京都の様子を偲ぶことができるという点では，改めて紐解いてみる価値がある。**矢野貫一『京都歴史案内』**（講談社，1974年）は，京都市街中心部の「洛中」に限ってはいるが，解説が詳しく，今も価値を失わない一冊であろう。**中村武生監修，京都新聞社編『中村武生とあるく　洛中洛外』**（京都新聞出版センター，2010年）は，地理学と歴史学の交差を標榜する監修者による京都の史跡案内である。他の書物では紹介されないようなマニアックな史跡に多数触れられているところに，監修者のこだわりを感じる。最近のものとしては，**同志社大学京都観学研究会編『大学的京都ガイド―こだわりの歩き方―』**（昭和堂，2012年）は，同志社大学・同志社女子大学に集う多分野の研究者が，それぞれの思い入れのあるテーマを執筆している。

京都に所在する著名寺院について知るには，**『古寺巡礼　京都』全28巻**（淡交社，1976～1978年），**梅原猛監修『新版　古寺巡礼　京都』全40巻**（淡交社，2006～2009年）が良い。京都の主要寺院を１冊につき１寺院の割り当てで紹介する。カラー写真が豊富に使用されていることが目を楽しませる。個々の寺院についてはもっと詳しい書物もあるだろうが，それぞれの概略を知るためには過不足ない。

新創社が編集した**『京都時代 MAP』**（光村推古書院）というシリーズは，各時代の復元地図と，半透明の用紙に印刷した現代の地図とを組み合わせというユニークな構成の歴史地図集である。両者を重ね合わせて見ることによって，過去と現代の京都を対応させて理解することができる。フィールドワークの資料としても使いよいであろう。「平安京編」（2008年），「安土桃山編」（2006年），「幕末・維新編」（2003年），「伝統と老舗編」（2007年）と，総集編としての「京都・観光文化時代 MAP」（2006年）が刊行されている。

森浩一『京都の歴史を足元からさぐる』全６巻(学生社)は，同志社大学名誉教授で考古学の権威として知られる著者による大冊である。「洛東の巻」(2007年)，「洛北・上京・山科の巻」(2008年)，「北野・紫野・洛中の巻」(2008年)，「嵯峨・嵐山・花園・松尾の巻」(2009年)，「宇治・筒木・相楽の巻」(2009年)，「丹後・丹波・乙訓の巻」(高野陽子・三浦到協力，2010年)に分け，地域史を徹底解明する。著者の幅広い学識と知的好奇心に裏付けられた好著で，京都の歴史の奥深さを理解するにはうってつけの書といえよう。

(5)　考 古 学

考古学は文献史学と並ぶ歴史学の一部門であるが，文献史学が文字によって書かれた史料をあつかうのに対して，考古学は主として土地に埋もれた遺跡と，そこに含まれている遺物を対象とする。京都の遺跡を全般的に扱った書として，**平良泰久・久保哲正・奥村清一郎『日本の古代遺跡　京都Ⅰ』**(保育社，1986年)，**山中章・山田邦和『同28　京都Ⅱ』**(保育社，1992年)がある。Ⅰでは旧石器時代から古墳時代，Ⅱでは飛鳥時代から江戸時代にいたる京都府下の遺跡を紹介しており，考古学からみた京都の通史となっている。平安京から中世・近世の京都については，**堀内明博『ミヤコを掘る』**(淡交社，1995年)，**鋤柄俊夫『中世京都の軌跡―道長と義満をつなぐ首都のかたち―』**(雄山閣，2008年)，**京都市埋蔵文化財研究所編『つちの中の京都』１～４**(ユニプラン，１：2009年改訂，２：2001年，３：2006年，４：2010年)などがある。また，**山田邦和『京都都市史の研究』**(吉川弘文館，2009年)，**同『日本中世の首都と王権都市―京都・福原・嵯峨―』**(文理閣，2012年)には，考古学を中核としつつ，文献史学，歴史地理学などを総合した京都都市史に関する山田の研究がおさめられている。

(6)　各　　論

京都をあつかった研究には厖大な蓄積があるから，限られた紙数の中でその全てをとりあげるわけにはいかない。ここでは思いつくままに，いくつかのテーマについて触れておきたい。

平安京の研究の現状を知るためには，**角田文衛監修，古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』**(角川書店，1994年)が基本図書となる。平安建都1200年を記念して編纂されたもので，明治以降百年にわたる平安京研究を集大成した大冊である。なかでも便利なのは第２部第３章「左京と右京」の項であり，ここには文献史学と考古学の研究成果を総合して，平安京のそれぞれの地点の土地利用の変遷が詳述されている。また，本書の付図である「平安京条坊復元図」「平安宮大内裏(平安宮)復元図」「平安宮内裏復元図」「平安宮朝堂院・豊楽院復元図」もまた，現在望み得る限りでは最良の成果である。本書「左京と右京」の本文と付図の「平安京条坊復元図」のコピーを持って京都の町を歩くと，平安京を体感することができよう。

平安京の前提となる平安時代の歴史については，その流れをダイナミックに描き出した**吉川真司編『日本の時代史５　平安京』**(吉川弘文館，2002年)を推したい。また，**朧谷寿・山中章編『平安京とその時代』**(思文閣出版，2010年)には，平安京研究の最新の論文が集められている。都市としての平安京と，そこに存在した貴族邸宅については，**太田静六『寝殿造の研究(新装版)』**(吉川弘文館，2010年)，杉山信三『院家建築の研究』(吉川弘文館，1981年)，**西山良平『都**

市平安京』（京都大学学術出版会，2004年），**朧谷寿『平安貴族と邸第』**（吉川弘文館，2000年），**朧谷寿・加納重文・高橋康夫編『平安京の邸第』**（望稜舎，1987年），**京樂真帆子『平安京都市社会史の研究』**（塙書房，2008年），**西山良平・藤田勝也編『平安京の住まい』**（京都大学学術出版会，2007年）などがある。

なお，平安京以前の首都であった長岡京については，**国立歴史民俗博物館編『桓武と激動の長岡京時代』**（山川出版社，2009年）がわかりやすい。**山中章『長岡京研究序説』**（塙書房，2001年）には，長岡京研究を主導してきた著者の論文がまとめられている。また，古墳時代から飛鳥時代にかけての京都盆地の豪族を知るためには，**中村修也『秦氏とカモ氏』**（臨川書店，1994年）も勧められる。

平安時代の人物史についても多数の業績があるが，その中でも，角田文衛の一連の業績を紹介しておく。眼光紙背に徹する史料の読みと大胆な仮説は，今もその輝きを失ってはいない。**角田文衛『王朝の映像―平安時代史の研究―』**（東京堂出版，1970年），**同『王朝の明暗―平安時代史の研究第２冊―』**（同，1977年），**同『王朝の残映―平安時代史の研究第３冊―』**（同，1992年），**同『王朝史の軌跡』**（学燈社，1983年），**同『角田文衛著作集４　王朝文化の諸相』**（法藏館，1984年），**同『同著作集５　平安人物志　上』**（同，1984年），**同『同著作集６　平安人物志　下』**（同，1985年），**同『同著作集７　紫式部の世界』**（同，1984年），**同『紫式部伝』**（同，2008年）など，いずれも平安時代に関心を持つ者にとっては必読である。

中世の京都については，前述した**鋤柄俊夫『中世京都の軌跡』**，**山田邦和『日本中世の首都と王権都市』**の他，**高橋康夫『京都中世都市史研究』**（思文閣出版，1983年），**高橋昌明編『院政期の内裏・大内裏と院御所』**（文理閣，2006年），**高橋康夫編『中世都市研究12　中世のなかの「京都」』**（新人物往来社，2006年），**川嶋将生『「洛中洛外」の社会史』**（思文閣出版，1999年），**大村拓生『中世京都首都論』**（吉川弘文館，2006年），**仁木宏『京都の都市共同体と権力』**（思文閣出版，2010年）などを見るべきであろう。

戦国時代の京都については，『洛中洛外図屏風』を史料として扱ったものが多い。**瀬田勝哉『増補 洛中洛外の群像―失われた中世京都へ』**（平凡社ライブラリー，平凡社，2009年），**黒田紘一郎『中世都市京都の研究』**（校倉書房，1996年），**高橋康夫『洛中洛外―環境文化の中世史』**（平凡社，1988年），**今谷明『京都・一五四七年』**（平凡社ライブラリー，平凡社，2003年），**小島道裕『描かれた戦国の京都―洛中洛外図屏風を読む―』**（吉川弘文館，2009年）などが秀逸。

天下統一後の織豊政権期（安土・桃山時代）の京都については，**日本史研究会編『豊臣秀吉と京都―聚楽第・御土居と伏見城』**（文理閣，2001年）が詳しい。**中村武生『御土居堀物語』**（京都新聞出版センター，2005年）も参考になる。

徳川幕藩体制下においては，政治的中心が京都から江戸に移ってしまったため，なんとなく京都の影は薄くなった感がある。しかし実は，江戸時代においても京都は江戸や大坂と並んで「三都」と呼ばれ，全国の文化・学術と工業生産の中心としての地位を譲らなかった。この時代の京都については，**林屋辰三郎・森谷剋久編『江戸時代図誌』第１巻「京都１」・第２巻「京都２」**（筑摩書房，1975・1976年），**森谷剋久『季刊論叢日本文化　11　上洛』**（角川書店，1979年），**鎌田道隆『季刊論叢日本文化　４　近世都市・京都』**（同，1976年），**鎌田道隆『京**

花の田舎』(柳原書店，1977年)，**中村武生『京都の江戸時代をあるく**』(文理閣，2008年)を挙げておこう。

明治の京都は，天皇の「東幸」という打撃を乗り越えて，見事な近代都市として生まれ変わった。**小林丈広『明治維新と京都**』(臨川書店，1998年)，**梅棹忠夫・森谷剋久編『明治大正図誌』第10巻「京都」**(1978年，筑摩書房)，**丸山宏・伊従勉・高木博志編『みやこの近代**』(思文閣出版，2008年)といった書が有益である。明治以降の近代建築も京都には多数残されている。**京都建築倶楽部編『モダン・シティー・KYOTO―建築文化のカタログ都市―**』(淡交社，1989年)，**ギャラリー・間編『建築マップ京都**』(TOTO出版，1998年)や**国立博物館・文化財研究所編，苅谷勇雅『京都―古都の近代と景観保存**』(日本の美術474，至文堂，2005年)といった書を手掛かりに，ひとつでも多くの建築を見て歩くことを勧めたい。また，**吉田守男『日本の古都はなぜ空襲を免れたか**』(朝日文庫，朝日新聞社，2002年)は，第二次世界大戦下の京都を扱った貴重な研究であり，京都が原爆の投下予定地だったという恐るべき事実を解き明かしている。

その他，京都の町家とそのバックグラウンドを造り出した町共同体については，**中村昌夫『京の町家**』(河原書店，1994年)，**五島邦治『京都　町共同体成立史の研究**』(岩田書院，2004年)，**高橋康夫『京町屋・千年のあゆみ**』(学芸出版社，2001年)，**丸山俊明『京都の町家と町なみ**』(昭和堂，2007年)。京都を代表する祭礼のひとつである祇園祭については，**脇田晴子『中世京都と祇園祭**』(中公新書，中央公論新社，1999年)，**河内将芳『祇園祭と戦国京都**』(角川学芸出版，2007年)，**谷直樹・増井正哉編『まち　祇園祭　すまい―都市祭礼の現代―**』(思文閣出版，1994年)，**米山俊直編『ドキュメント　祇園祭―都市と祭と民衆と―**』(NHKブックスカラー版，日本放送出版協会，1986年)などがある。また，**伊東宗裕『京の石碑ものがたり**』(京都新聞社，1997年)，**同『京都石碑探偵**』(光村推古書院，2004年)，**八木透『京都の夏祭りと民俗信仰**』(昭和堂，2002年)，**川勝政太郎『京都の石造美術**』(木耳社，1972年)，**竹田聴洲『日本の民俗26　京都**』(第一法規，1973年)，**佐野精一『京の石仏**』(サンブライト出版，1978年)，**赤井達郎『京都の美術史**』(思文閣出版，1989年)といった文献も，それぞれの分野における基礎的業績として重要である。　(山田)

2　地理学分野

つぎに，地理学(人文地理学・歴史地理学)の分野から京都学をまなぶための基礎文献について紹介をしていきたい。ただし，冒頭にも記したように，現実的な研究や学習の場において，これは地理学，これは歴史学というかたちで明確に峻別しているわけではもちろんないし，そもそも京都学とは京都という地域を対象とした地域学の一つである以上，多領域からの観点や研究者らによる広領域の研究が多いことも特徴の一つとしてあげられよう。また，地理学的な観点を含みつつも1の歴史学分野ですでに紹介されているものは，ここでは割愛したい。さらに，地理学は地域を扱う古典的な学問であり，隣接分野と複合的に研究されることも多い。そうした意味で，ここでは地理学が最も重要視する資料である地図を取り扱ったものを特に視野に入れつつ，資料として活用できるもの，また京都という地域を理解し学ぶ切り口となる重要なものを中心に紹介していきたい。

(1)　アトラス(歴史地図帳)

欧米における都市研究・地域研究においては，古代，中世，近世など時代区分・事象ごとの空間構造を地図化して書物としたアトラス(歴史地図帳)が多く見られるのに対し，京都を含めた日本においてはそうした文献はほとんど存在しない。そうしたアトラスの意義と必要性も認識しつ，ここでまず紹介したいのが**足利健亮編『京都歴史アトラス』**(中央公論社，1994年)である。これは地理学をはじめ，歴史学・建築学・考古学など広領域からの研究者が集まり，議論を重ねた上で京都の地域形成についてそのありかたを地図化し，その図版を中軸として論じた書物である。私事ながら筆者(天野)も学部４年生から参画し，中世寺院の分布，祇園祭のルート，山科・下京本願寺寺内町，琵琶湖疏水をはじめとした項目を担当し，また収載図の原図や製図を担当したことで今振り返っても感慨深い書物である。京都という地域についてのアトラスとしては，現在でも重要な意義をもつものである。また，こうした問題意識に類似した観点からの書物としては，より入門的・概説的なものとして**植村善博・香川貴志編『京都地図絵巻』**(古今書院，2007年)がある。京都の歴史文化の諸事象だけではなく，観光や産業といった現代の京都の都市問題を考えていく上でその入門となる書物である。

(2)　京 都 地 誌

京都という地域を地理学的に考察し，その地域像を紹介する地誌学的な観点からの書物としては，多くのものが存在するが，ここではまず**『日本の地誌　6　近畿圏』**(朝倉書店，2006年)を挙げておきたい。書名の通り京都を含む近畿を対象としたなかで京都府，京都市域が取り上げられ，その行政区分，観光や工業，農業といった諸側面からみた地域誌が紹介されている。京都とは何か，その地域像を全体的に俯瞰し，周辺の大阪や奈良などとの関わりを把握するうえでは好適書である。また，近代に入り作成された新旧の地形図からその地域の変遷を切り口として京都を紹介したものとして古くから定番的なものとして，**『日本図誌体系　近畿Ⅱ』**(朝倉書店，1973年)も欠かせない存在である。全国の主要な地域を対象として，明治から大正，昭和へと移り変わる地域のありかたを，地形図とその解説を中心として読み取ることができるシリーズの書物で，地図の読み取りへのトレーニングにもなる。出版時期からも，高度経済成長期までの移り変わりが対象とはなるものの，最新の地形図を手元に置きながら比較考察するのも地理学的な京都への関心をかき立ててくれる。中高の授業等，社会科・地歴教科教育の教材研究としても意義のある書物であり，多くの図書館に所蔵されていることからアクセスも容易である。全国各地のものが出版されているので，地域学という観点から京都学という枠組みをこえて，ぜひ手に取ってもらいたい一書である。

また，この文献よりも対象となる範囲は狭いものの，より近年になり作成されたものとしては**平岡昭利・野間晴雄編『近畿Ⅰ　地図で読む百年―京都・滋賀・奈良・三重』**(古今書院，2006年)がある。京都に関しては対象となる地図の範囲は前傾書よりも相当狭いものの，近年の地理学的な研究成果もふまえつつ，地域の特質を読み取る上で重要な示唆をあたえてくれる。

(3)　古地図集／地形図類について

京都という地域を地理学の立場から学ぶうえでは，さまざまな地図を収集し，比較検討しつつ活用することが非常に重要なプロセスであるが，特に地図に関してはその資料収集自体が一つの研究となりうるほど奥深いものがある。

わたしたちが京都を学ぶ上でまず欠かせない地図類を紹介したものとして，かつ同志社女子大学の図書館や近隣の公立図書館などでも比較的閲覧しやすいものとして挙げておきたいのが，京都に関する古地図や絵図類を集成した『**慶長・昭和　京都地図集成**』（柏書房，1994年）である。本書は古地図という資料面から見て，京都の地域研究に必要不可欠の地図集といえよう。平安遷都1200年を記念して，京都の地域史を考察していく上でその画期となる時代や，地域理解に書かせない地図，絵図を中心として集成作成された非常に大型（46×62cm）の書物である。

さて，この中に収載されている多数の図版の中で，京都を学ぶ上でとくに重要な地図として紹介しておきたいものがいくつか存在する。紙幅の関係もあるので，ここでは三点紹介しておきたい。

①近世絵図　「京大絵図」

近世京都の都市景観を描写した絵図は多数刊行されているが，江戸初期から長期間増補，刊行が重ねられてきた代表的な絵図の一つが，林吉永刊の「京大絵図」である。初期のものは墨刷りで京都が長方形（縦長）で表現されていたが，新撰増補（貞享３年［1686］）からは幅広の形となり，また木版手彩色ということもあり，市街地のみならず京都市街地の周辺を取り囲む山の描写も非常に美しい絵図となっている。近世には測量された図は，伊能忠敬による江戸後期の全国測量図等の特殊なものを除くと基本的には存在せず，方位や縮尺，長さなどもゆがみが多く，不正確な部分が多いが，当時の京都を人々がどのように認識し，知覚していたのかという観点から見ていくと興味深い。さらに，有名な寺社仏閣や洛中洛外の名所等の地誌的な説明も随所になされていることも本図の特色である。また江戸中期以降に作成された京大絵図では三条大橋を起点とした京都市街各地への距離，方位等も一覧で表記され，近世京都の観光のあり方をうかがい知ることもできる。

②仮製二万分一地形図

日本陸軍参謀本部陸地測量部ならびに第四師団司令部が作成した仮製二万分一地形図である。この地形図は日本で最初に近代測量技術によって作成された大縮尺地形図であり，近畿地方を中心的な対象地域として，正式な三角測量ではないものの，明治初期に作成された初期の二万分一地形図の中では比較的正確で，仮製地形図と称される（のちに正式二万分一地形図も作成される）。後に作成される五万分一，二万五千分の一といった一連の全国をもカバーした地形図へと連なる日本の近代地形図作成史を考える上でも重要であり，また京都を近代測量技術によって表現した地形図として最も古い地形図であることから，京都中心部の当該地形図が作成された明治22年（1889）前後の地域景観を知ることができるだけでなく，その測量の正確性から，それ以前の近世や中世豊臣秀吉の都市改造―秀吉によって造営された都市囲郭「御土居」の存在も明瞭に確認できるし，場合によっては平安京造営に代表される条坊制の大路・小路のありかたといった，古代からの京都形成史の一端をもうかがい知ることのできる地形図として，京都

地域研究の基礎的資料として非常に重要である。なお，仮製二万分一地形図の京都の図幅は，『慶長・昭和　京都地図集成』に収載されている他，いくつかの復刻版が刊行されている。中でも，**地図資料編纂会編『明治前期　関西地誌図集成』**（柏書房，1989年）は関西全域の仮製二万分一地形図を現行の二万五千分一地形図の図幅に合致するように編集・縮小したもので，利用に便利である。

③京都近傍図

つぎに紹介するのは，同じく近代地形図であるが，大正に入り作成された京都近傍図である，一万分一という大縮尺の多色刷り地形図であるが，とくに注目されるのはその作成経緯である。本図は「御大典図」すなわち天皇の即位を記念して作成された地形図であり，後には昭和（京都），平成（東京）と元号の変わり目に作成され続けている。大正天皇即位を記念して1915（大正４）年に日本陸軍参謀本部によって作成された本図は，皇族や貴族院議員等に限定して配布されたもので部数が限られているが，軍事基地の配置といった後の昭和初期に作成された地形図では軍機保護法によって改描された「隠された場所」なども明瞭に読み取ることが可能である。たとえば現在の伏見区深草周辺は，陸軍第十六師団本部，練兵場，歩兵営をはじめとした軍事基地が集積した地域であったが，そうした景観も詳細に把握することができる。さらに，一万分一の大縮尺ということもあり，地形条件も詳細に描出され，現在では使用されていないくさび形のケバで地形が表現されていることも特徴である。近代の京都の都市景観を考える上で学術的に重要であるだけでなく，多色刷りということもあり非常に美しい地形図である。

以上三点の絵図／地図に関して紹介してみたが，本書には他にも数多くの資料が収載されており，いずれも京都の都市景観の把握に重要なものである。大判で非常に重く，閲覧やコピーが大変な書であるが，そもそもオリジナルの絵図を熟覧することは博物館の展示ケース越しでしかできない作業でもあるので，臆せずトライしていただきたい。

地籍図（公図，土地台帳附属地図）

また，本書に収載されているもの以外にも，京都の景観を考える上で重要な地図資料がある。こうした古地図や地形図類とは全く別の存在のものとして，近代以降の土地所有や土地の利用のあり方，さらには地価や小字を中心とした地名を伝える資料として，市町村役場の税務課や地方法務局に所蔵される土地台帳附属地図（地籍図）が存在する。近代以降の都市景観を把握する上でも，また近代以前の様相を推測する上でも非常に重要な大縮尺の地図資料として，地理学のみならず広領域での地域研究の基礎資料となるものである。一般的には上記の場所に赴き，閲覧申請をおこない調査を進めていくことになるが，おおくの地籍図は土地所有の移転や土地利用形態の変化を上書きしており，判読には一定の経験や知識が必要となる。より利便性を高めてまとめた編集図として，京都に関しては，明治から大正期にかけての地籍図をおさめた**『復刻版　京都地籍図』**（不二出版，2008年）が比較的閲覧しやすい資料である。全４巻にCD-Rをつけ，一般の読者にも場所が検索しやすいかたちになっており，また地籍図に関してはカラー印刷で筆界線も判読しやすい。さらには都市域の拡大や隣接する市町村合併の時期にも当たるため，当時の市域とその周辺の地域もカバーしており，近代京都の市域拡大をも実感することのできる資料となっており，京都の都市景観の変遷をミクロスケールで考えるうえで必要

な資料である。

地形図(旧版／現行地形図)の閲覧・入手方法

このほかに，京都という地域を基本的に，かつ地理学的に理解する上で地形図は常に欠かせない存在である。京都に関しても数多くの地形図が刊行されているが，書物とは異なり地形図はそもそも一枚ものであり，「地図集」というものは学校教育での地図帳を除くと，それほど多く刊行されておらず，また一般的には縮小されていたり，部分図の集成というものが多い。基本的には地形図類は１枚ごとの資料であり，その入手・閲覧の方法についてもここで簡単に触れておきたい。地形図はかつて日本陸軍参謀本部の測量という軍用図であったが，現在では国土交通省国土地理院が発行するもので，日本政府の刊行物である。縮尺によって区別がなされており，現在刊行されているものとしては，一万分一，二万五千分一，五万分一の地形図が存在する。一万分一は大都市周辺部を中心に作成されており，京都についても北郊の北山地域や，京田辺キャンパス周辺地域については残念ながら作成されていないものの，中心市街地についてはカバーされ刊行されている。二万五千分一，五万分一の二種類については全国範囲について作成されており，京都地域についてももちろん活用できる。これらは縮尺等が異なるため，例えば中心部の狭い範囲の問題について考える場合は大縮尺の一万分一，やや広い範囲を対象とする場合は五万分一などと，その目的に応じて使い分けるのが良い。同志社女子大学図書館の書庫には，全国の五万分一地形図を用意しているほか，研究室等にも設置しているので必要に応じて閲覧いただきたい。ちなみに同志社大学図書館には実は地形図は置かれておらず，女子大の京田辺図書館のみに収蔵されている。どの地域がどの名称の地形図か，その図幅名称についてもインデックスマップが用意されているので，検索が可能である。たとえば京都中心市街地の地形図がほしい場合は，「京都東南部」・「京都東北部」・「京都西南部」・「京都西北部」の４枚の地形図を用意すれば確認が可能，といったこともわかるので，活用したい。また一枚が270円(五万分一，二万五千分一)からと低価格なため，むしろカラーコピー複数回でコピーするよりも安く，現物を購入して実際に京都のフィールドで活用することも一般的である。大規模な書店には京都の地形図が大きな鉄製のマップケースにおさめられておるので一枚単位で購入できるし，また京都市内では京都大学農学部前に全国の地形図や京都の復刻古地図等をそろえている関西地図センターという地図専門の販売店もある。

また，地形図は地域開発によってその変化が大きくなったりすると，修正の測量がなされて新しいものが刊行されていく。また先述した仮製二万分一地形図等は明治時代のものであり，図書館で一般に収蔵という性質のものではない。戦前や，高度経済成長期等古い版の地形図(旧版地形図)の閲覧は，総合大学の図書館でも非常に困難であり，国立国会図書館(東京本館)にて一部は閲覧もできるがアクセスの問題がある。

そこで，国土交通省国土地理院では測量法第28条(測量成果の公開)の規定に基づいて，旧版地図の謄本交付(コピー)を行っている。インターネットでコピーしたい地形図の範囲，時代(これはHP上にて確認できる)を指定して申請，郵送で送られてくるというサービスが提供されているので，同省HPのほうも併せて確認いただきたい。これらの地図資料をも含めた資料の活用方法は，京都に限定したものではなく他地域の研究においても共通して展開することでき

る方法である。こうした地理学的な地域調査の方法について詳細に解説した書物として，**野間晴雄・香川貴志・土平博・河角龍典・小原丈明編著『ジオ・パル NEO 地理学・地域調査便利帖』**（海青社，2012年）があるので，併せて活用いただきたい。

(4) 地　　名

歴史学分野の項目でも紹介されているように，京都の地名に関して考察を行う場合，第一にあげられるのが**『京都市の地名』『日本歴史地名大系』27**（平凡社，1979年）である。地名の由来や地域の歴史的変遷に関して出典とともに詳細に記されたこの地名体系は，京都の地名を学ぶ上で基礎ともなる必須の書である。その後に出版された京都の地名に関する書物は非常に数多く存在し，読み物としても楽しいものが多い。しかしその多くが本書をベースにしており，日本歴史地名大系の焼き直し的な感触も否めない。それほどに本書が大きな意義を今なお有しているのであるが，一方では地名研究は，地域の成り立ちや地形条件をも反映し，歴史学だけでなく地理学や民俗学，日本語学等の幅広い観点から研究が進められてきている。そうした地名研究の多様なながれをふまえる意味では，**京都地名研究会編『京都の地名検証』『京都の地名検証 2　風土・歴史・文化をよむ』『京都の地名検証 3　風土・歴史・文化をよむ』**（勉誠出版社，2005年，2007年，2010年）の存在があげられる。本書は地名にまつわる歴史というよりも，より地名そのものの成立背景に着目し，広領域の研究者からの論考をおさめたもので，京都の地名を網羅的にカバーした辞書的な書物ではないものの，京都の地名を考える上では必要不可欠の書といえよう。索引図版なども整備され，また地図類も多く収載されており，地域と地名のつながりも学ぶことができる。

(5) 歴史地理学／都市地理学

京都の歴史的な空間構造について，歴史地理学の観点から考察した書物としては，まず第一に足利健亮による一連の書物があげられる。なかでも**足利健亮『中近世都市の歴史地理』**（地人書房，1984年）の存在が重要であろう。地図から過去の景観を復原していく歴史地理学的なその研究視覚と分析の過程は非常に興味深く，研究書としてだけでなく，平易な表現で地理学・歴史地理学という学問の面白さの一端にふれることができる。また同じく**足利健亮『日本古代地理研究』**（大明堂，1985年），**同『考証・日本古代の空間』**（大明堂，1995年）では，京都を中心に展開した古代官道の展開や，その位置の推定に関する論考や，平安京以外の宮都であり，南山城におかれた恭仁京の復原や，都城の構造，さらには地名の考察といった幅広い歴史地理学の視点を学ぶことができる。また没後に刊行された**『地理から見た信長・秀吉・家康の戦略』**（創元社，2001年）では，京都を中心とした秀吉の都市経営構想から，全国の他地域への地域戦略のあり方を地理学的な視点から考察した書としても興味深く読むことができる。

また，同じく古代の京都に関して歴史地理学の立場から論じた書として非常に重要なものとしては，歴史地理学の方法論，宮都の景観と意味，さらには歴史地理学が従来重視してきた景観復原から，より広い領域の学問領域にも意義を与えうる意味論へとその分析を高めつつ議論を展開した**千田稔『古代日本の歴史地理学的研究』**（岩波書店，1991年）も京都以外の地域も視

野に入れた特筆すべき研究書である。また都市図を切り口として京都の古代から近現代への都市構造を取り扱った論考をあつめたものとしては，研究書ではあるが**金田章裕編『平安京―京都　都市図と都市構造』**（京都大学学術出版会，2007年）も参考となる。また，地理学の立場以外の主として建築学や都市史研究の研究者の論考も多く含まれるが，近代京都を学ぶ上での重要な書物としては，京都新聞に連載された記事を基にしたものとして，広く読み物としても興味深い**丸山宏・伊従勉・高木博志編『みやこの近代』**（思文閣出版，2008年），ならびに，より研究書としての専門性も高められた論文集である**丸山宏・伊従勉・高木博志編『近代京都研究』**（思文閣出版，2008年）があげられる。これらは京都大学人文科学研究所を中心として組織された研究会「近代京都研究会」のなかで発表・議論を経たテーマを中心としてまとめられたものであり，京都という地域を考察していく上で，古代や中近世だけでなく，近代という時間軸も重要な視座であり，近代以降の大きな都市景観の変遷を視野に入れていくことは，「京都学」の総合的な理解に必要不可欠な部分であるが，そうした意味でもこの二書は重要な意義のあるものといえよう。また，観光や文化財の保護と活用，地域経済といった京都観光学のありかたを考えていく上でも大きく寄与するものとなる。（天野）

おわりに

以上のように本稿では，「京都学」を学ぶための導入となる書物や地図類の概要について，山田邦和の専門とする歴史学，考古学，さらに天野太郎が専門とする地理学の主として２つの分野を中心として，本学図書館などでも比較的入手・閲覧しやすいものを中心として紹介してきた。「京都学・観光学コース」とはどのようなコースなのか，また「京都学」とはどのような学問なのか，少しでも興味・関心を持たれた学生さんが自ら学び，探求していく上での道標となるものばかりである。もちろんここで紹介した図書類はそのごく一端にすぎず，これ以外にリストから漏れた優れたものも数多く存在する。私たちもガイドを作成しつつ，後になりあれもこれもと思いつくものが多いが，そうした文献については授業などでも紹介・発信しており，気軽に研究室を訪れて資料に触れていただきたい。

また，京都学は京都という地域にねざした広領域からなる学問体系であり，本学でまなぶ学生諸氏におかれては，これらの書や地図を輩として，ぜひ歴史の舞台となった京都のまちを歩いて実感していただきたい。有名な寺社仏閣のみならず，ふと見た小路の傍にも，意外な歴史が佇んでいることも多い。

ここで紹介した文献を「京都学」という学問の扉の入り口として捉えていただき，幅広く奥深い京都学の世界へとぜひ足を踏み入れていただきたい。（山田・天野）